

## 北京大學藏西漢竹書『蒼頡篇』の病名について

猪飼 祥夫

北里大学 東洋医学総合研究所 医史学研究部

『蒼頡篇』は秦の丞相の李斯が著した字書と言われている。字書の源流と発展の上で非常に重要な意義を持っている。しかし『蒼頡篇』は唐宋時代にはすでに失われていた。20世紀に入って、敦煌、居延、阜陽、水泉子などの漢代の遺跡から、『蒼頡篇』の残簡が発見された。2009年北京大學に収蔵された西漢（前漢）の竹簡に大量の『蒼頡篇』竹簡が含まれていた。

北京大學藏西漢竹書『蒼頡篇』は完全な竹簡が53枚、切斷された竹簡が34枚、それらを繋ぎ合わせて63枚の整理された竹簡と残簡18枚の81枚が合計である。竹簡の長さは30.3から30.4センチ、幅は0.9から1.0センチである。得られた字は、完全な字が1317字で、不明な字が20字である。字體は隸書であるが、小篆の形を残している。『漢書藝文志』によれば「『蒼頡』の七章は、秦の丞相李斯が作ったものである。『爰歴』の六章は、車府令の趙高の作ったものである。『博學』の七章は、太史令の胡毋敬の作ったものである」とあり、「漢が興って、閭里の書師（文字教育の民間教師）は『蒼頡』『爰歴』『博學』の三篇をあわせて、六十字で切って一章とし、およそ五五章、合わせて『蒼頡篇』とした」とある。北京大學藏西漢竹書『蒼頡篇』はこの三篇の書物が合わさって漢代に改編された文献である。この『蒼頡篇』には「漢兼天下」の句があり漢代になって抄寫されたと考えられ、その年代は紀元前100年ごろで、漢の武帝後期である。

『蒼頡篇』は、當時の通用漢字が使われている。その中には、病名や身體的特徴、醫學の治療法などが含まれている。1317字の中で、醫學に關係がある字は29字ほどである。

「瘵、瘵、癰、瘵」（簡2）、この句は病名が羅列されたものがある。「瘵」は小兒の瘵瘵である。「瘵」は「癰」のことだとする。「癰」は膿をもつ化膿性の疾患、特に頸部の癰癰などである。「瘵」はやや小さい腫れである。

「疢、痛、瘵、欬」（簡3）は、前後の字の關連性が薄い。「疢」は熱病である。「痛」は疾病や創傷の痛みである。「瘵」は「嗽」の字の通用で、「欬」は「咳」である。「瘵欬」は、「嗽咳」で一つの言葉としても考えられる。

「瘵、熱、疥、癰、瘵、瘵、癰、疽」（簡36）。「瘵」は疲労性の疾病で、黄疸を特徴とする。「熱」は熱の症状を指すと思われるが、阜陽雙古堆の『蒼頡篇』にはやまいだれがついているので、疾病名かもしれない。「疥」は疥癬のことである。「癰」は、原竹簡の字はまだれであるが、この字の通用である。悪質な疫病である。「瘵」は婦人科の腹部の膨隆を表す言葉で、子宮癌や筋腫などの症例である。「瘵」は痺れであり、風寒湿による症状である。「癰」は化膿性の癰で黒く腫れるものである。「疽」も癰であり、やや慢性化したものである。

「瘵、斷、瘵、瘵」（簡39）。「瘵」は瘵疾をさす。「斷」は、裁斷の意味か。「瘵」は馬の脛の傷という。ただ単に傷の意味もある。「瘵」は皮膚が剥げる意味である。

病名や症状のほかに、治療法として「毒藥醫工、抑（抑）按啟久」（簡3）という章がある。「毒藥」は藥物治療を表し、「醫工」は醫師であり、「抑（抑）按」は按摩を表し、「啟久」は砭石と灸治療のことである。また身體的特徴として、「癰（ほくろ）」（簡49）や狂（簡50）、禿（簡50）、盲（簡51）などがある。

『蒼頡篇』の文字は體表の觀察によって理解できる程度の疾病名であり、同時代の馬王堆、張家山、老官山の醫書に比べて一般的である。内科的には「瘵」や「瘵」の二字が知られるが、「瘵」は黄疸のような体表に現れる特徴を持ち、その原因は美食にある消渴に付随する病名として理解されている。「瘵」は腹部の硬結で妊娠以外の身體特徴として分かるものであった。

前漢後期になると「蒼頡多古字、俗師失其讀」と言われ時代と合わなくなった。そのために『蒼頡篇』の注釋が書かれるようになり、またその後の『說文解字』にも大きな影響を及ぼした。